

読 書

岩波講座 世界歴史

1

山口 嘉夫



この歴大な講座の第一巻（古代1）が出たので、期待を以て読んだのであるが、その結果は幻滅であった。それについてはすぐ後で触れることにして、何故こうも期待と実体とに差があるかを調べるために、岩波書店の出しているこの講座についてのパンフレットを読みかえしてみた。

パンフレットの巻頭に「本講座の特色」および「刊行のことば」があり、それらを読めば、誰だつてすばらしい歴史書であろうと想像する。しかし同一二ページ以下の全巻の内容を見れば、既に羊頭狗肉であることはあまりにも明瞭である。

この講座は全世界を対象としグローバルな世界史だそうであるが、相も変らぬ欧米中心主義およびアジアでは印華中心であることは疑問の余地がない。即ちメソポタミア・エジプトに始まるヨーロッパ、および新航路・新大陸発見以後の新大陸や、インド・中国という、いわゆる歴史のメイン・ストリームについては一応

手落ちなく項目が並んでいる。しかしそれ以外の歴史はまるで存在しなかったかの如くである。もちろん虫眼鏡でよくよく見れば、忘れてはいないとも言いたげに、申しわけ程度の項目があるようだ。それにしても、われわれに Familiar な印華以外のものもろの隣国、とくに東と南のアジア諸国や大洋州の歴史にもっと多くのページをさくべきではなかったか。また、白人渡来以前のフリカ（エジプト以外）の歴史はいつどこにあるというのだろうか。

このような構成でグローバルな全地域・全時代を含む世界史とは何ごとであるか。

植民地以前のアメリカ大陸の歴史が、ただの一節でカバーしきれぬほど歴史に乏しいのか、それとも考古学は歴史に非ずなのか。百歩ゆずって考古学を除外するにしても、スバニヤード以前のいわゆる Black Africa において中世王国が栄え史書があったはずだ。これはどうなのか。

この『世界歴史』は古代オリエントをもって始めている。最近の学問の進歩は、農耕・牧畜の起源について数々の新しい知見をもたらした。このような著しい成果を本格的にとり入れることなく、古典的な歴史書の型どおりに開巻するのは奇妙である。その点、河出書房の『世界の歴史』が今西の人類の誕生ではじまり、ユネスコ編の『世界史』も同じように Wooley（等）の旧石器時代の叙述よりはじまるのに比し、新鮮味を欠くばかりでなく、

既成の歴史書の編成にとらわれ過ぎたものといわねばならない。歴史は日に月に新たとなる学問のはずであるうし、既成の概念は打破し拡張されねばなるまい。

第一巻「古代1」を読んだ限りでは、あまりに小さな部分を多くの人が独立に書いており、著者間の調整はほとんどなかったらしく、数多くのチグハグな所があって、全く読みづらいというほかはない。これに対し中央公論社や河出書房の「歴史」は、一巻を一人の著者が通して書いているので、はるかに読み易かった。そして特に中央公論社の『日本の歴史』には読みごたえのある巻が多かった。岩波の『世界歴史』において中公方式が採れない事情があったとしたら、他の著者の原稿をお互いにもっと綿密に読み、加筆訂正し、読者に提供するだけの時間をかけてほしかった。あるいは各巻ごとに editor をきめ、みずず書房の『古代殷帝国』における貝塚の如き良心的な editorial work があって然るべきであった。

刊行のことによると三年間も準備したそうであるが、第一巻の出来ばえを見るに、原稿の集まるのを待ちかねて逐次印刷していったとしか思われないのだが、それは邪推であろうか。さらに巷間の説によれば、大学紛争により著作がすすんでいないとか。もしそれが真なら、三年間の準備とは建前で、当事者たちは机上に企画を放置してこのことにかんしては頭を休めていたか、あるいは他の仕事に専念していたに違いない。

第一巻の印象

写真・図が全くない。地図が、申しわけ程度に、しかも略図がのっているばかりである。それなのに、古代の遺蹟や著名出土品についてのかなり詳しい叙述が見られる。素養のある者にとってこれらの叙述の大部分は不必要であろうし、全く知らない読者にとっては図や写真のない簡単な解説文は甚しく不親切な処置といふべきであろう。⁽¹⁾この点に関していえば、写真版の追加は本の値段をつりあげ、また新しい写真をとるのに労力と時間を要するとの反論があり得よう。しかしこのころの日本の出版界を見るに、美術書ブームはいよいよ隆盛であり、いくつかの出版業者と協定すれば、すばらしい写真を格安に入手することが可能であったと思われる。岩波の『世界歴史』をへ読むものから如何にしてへ見る世界史の側面で改良するかについても真剣に検討されなければならぬ。なおもっと手軽な方法としては、ソビエト科学アカデミー版『世界史』のごとく写真よりもスケッチを多く入れるという方法もありえよう。古代の遺物は現物はもとより、相当にいい写真でさえ、なかなか見にくいものである。その点スケッチは多分に時代的（ないしは学界・学派の流行による）偶見の入りこむ余地はあろうが、写真よりしばしば見やすく、この『世界歴史』のレベルであれば、学派的時代的解決にもとづく deviation にそう目くじらを立てることはあるまい。

かつて史書は、ぎっしり文字のつまった書物を読むものであった。時代の進歩とともに、教育においても視聴覚教育が発達し、講義の方法も、スライド・映画・テレビなどで近代化が進んでいる。本についても、読む本から見る本、さらには聞く本、読みあろいは見ながら聞くものへと発展している。この点からすれば、岩波講座『世界歴史』は、古典的風貌をゆたかにもつ、たぐい稀なる時代錯誤的の一大企画と評すべきである。(他の書店の発行した乃至は発行しつつある歴史物と比べて見れば、それは明らかである。)

次に、前にも述べたように、執筆者間の連絡が不十分であって、第一巻を通読して古代オリエント世界について十分に理解出来るかどうか疑わしい。再言すれば、古代についてよりよく知る者にとっては、この叙述は断片的羅列的であって得るところ少く、よく知らない者にとっては、全体の関連がつかみにくく、精粗入りまじっていて、歯痒いことであろう。

この四半世紀における古代オリエント史の進歩はめざましいものがあり、日常生活・社会・経済・政治・軍事・外交などについて、詳しい記述の可能なものが少くない。その観点より、第一巻をみれば、これはわが国学界の実力の反映であって致しかたなし、といってしまうまでもであるが、欧米先進国においてすぐれた報告や一般向け高級書も輩出している今日、外国の *Encyclopaedia* な状況を紹介するのを専一と心がけるだけでも、もっといいもの

を書けたはずである。

たいへんに細かいことを一つ。第一巻の「古代オリエント世界」の三は、学位論文の *abstract* ではないか。これこそ標題の中の重箱のすみをほじくるものである。少くとも一般向け教養書としての本書の側面を考えれば、標題であるシ・メールの国家と社会についてもっと一般的・概観的記述があつて然るべきであつた。同様のコメントをすべき項目が他にもあるが、これ以上立入らない。

さらにエーゲ文明からギリシャにいたる部分では、すべてのよきものはギリシャに始まるとするかつての神話が、ここにも根強く残っている。ギリシャが如何に多くのものを古代オリエントに負うていたか、それをまざまざと教えてくれたのが、最近の斯学の発展の成果の一つではなかったか。この巻の「古代オリエント」と「地中海世界」はまさに異域同舟であつて、一つの歴史的発展としてとらえられてはいない。これはわが国における歴史・考古学の中の各専門分野間の交流の欠如の反映であろう。もちろん、専門馬鹿が理工系に特有な現象ではないことを明らかにする上で、われわれを安心させる効用はあるかもしれないが……。

なお、このように横文字の多く入る本は横組みにすべきであつた。ここで「横文字」と書いたのは魂胆があつたこと、この『世界歴史』ではすべてカタカナになっている。しかしこれは不十分であつたと考える。われわれが外国人と議論するとき、カタ

カナで知っていた固有名詞ではFとH、LとR、BとVなどの區別がなくて、話を通じないことが少くない。この『世界歴史』が広く教養書として、より有用であるためには、少くともところどころに原名がローマ字で入っている方が親切であったと思うからだ。また、インドや中国の著名な固有名詞等についても、例えば英語ではこのようにスペルのだということをつけ加えるのが教育的であった。これは、明治時代のような文化輸入期だから望ましいというのではなく、現代のように、外国へゆくこと、外国人と議論することの多い、国際交流の盛んな時代だからこそ、このような配慮が、殊に日本の場合に、必要だと信ずるからである。

蛇足

企画だけを聞いてこの『世界歴史』を推賞している有名人の言葉が、写真入りでパンフレットに並んでいる。実物を見ずに推薦するのは、他の商品の場合にはマスコミの風潮にのったいわゆる誇大広告として排撃されるのに、出版物については我国において古来からの伝統として罷り通り、この『世界歴史』にかんするパンフレットもその例外ではなかった。企画と執筆者の顔ぶれで、実物発行以前に評価を決定できるほどこれら有名人は先までお見透しなのであろうか。あるいは単なる東海の君子国の醇風美俗のあらわれに過ぎない瑣事なのであろうか。推賞者の豪華さに幻惑されて乏しい財布をたく諸者にとっては瑣事ではすまじえない

であろう。

マスコミに学者多数御活躍の時でもあり——それはそれとして社会的意義のあることまでも否定し去るほど非現実的なことを主張するつもりは全くもち合せていない。念のために——、また、出版業といえども、コマーションリズムを無視しては成立たないことはよく承知している。それにしても、読んで見ない前から見えてきた——読んできたの方がより正確であろう——ような絵空言はつつしんでほしいと考えるのである。

総括

第一巻「古代1」に関する限りでいえば、この岩波の『世界歴史』は、他の歴史ものに比し、やや専門的という点を除いてとりたててよいとは思われない。値段の似ているもので比較すれば、(1)少し前に書かれたものであり、かつ、(2)教条主義的引用に目をつむることにすれば、ソビエト科学アカデミーの『世界史』・古代の方が数等上出来であると考え⁽³⁾る。値段の差を無視していえば、このレベルの本としては、アンドレ・マルロー等編するところの『人類の美術』(新潮社から訳書が出ている)のシニメルやバビロン・アッシリアなどの方が、極めて豊富な写真・図表をのぞいて比べても、この『世界歴史』・古代よりはすぐれた解説であると思われる。

終りに

(1) 紳士の集りである人文系において、「いささか不適當である」というところを、われわれの仲間では「……は全くの誤りである」と直接法で面責することがしばしばある。

(2) 批判するのは時間が無駄だと信ずるならば、黙殺する。批評に時間と労力を投入するのは、それなりの価値を認めるか乃至は改善されてよりよくなるのを期待するからである。

(3) これはアマチュアの一石であって、ムルシリシユ一世のバピロンへの一撃にもあたらないことをよく承知して書いている。しかし第一巻を読んで書かずにいられたかった心情をくんでもらいたい。

(4) 大学紛争にあたって、学生は学問について根本的に考えることをわれわれに迫った。一部学生の過激な行動を容認することはできないが、学問にたいして根源的な批判をせねばならぬ点については、学生たちに全く同感である。書評についてもこれまでの微温的あるいは同好のサークルのメンバーをお互いにもちあげようという態度ではいけないであろう。評者は専門の分野での書評や論文批判においては、ここで示した程度のことを以前から一貫して実行してきたことを付記しておきたい。(一九六九・七・二〇)

〔追記〕 第一回配本・第一巻の印象が、かくも芳しくなかったため、第二回配本以降については、横目で睨んで胸算用の最中で

あって、まだ批評できる段階ではない。

(1) 読者が相当によい歴史地図と歴史画集をもっているものと仮定しているのであれば、話は別である。もしそうでないのなら、この本を読むのは絵の欠けた『山海経』を読むのと同然であろう。

(2) ここで、このような仕事が不適當であるなどというつもりは毛頭ない。このような緻密な研究が極東の孤国日本でも行われていることを心から喜び声援を送りたい。しかし、それを生の形で、このように広範囲なタイトルの下で長く書くことが不適當だと言っているにすぎない。なお、このついでに付言したいが、このような研究成果を日本語で発表するのはどうかと思われる。このような国際性ある研究発表は、世界の学界に速かに appreciate され評価されるべく、その学界に広く通用している言語で発表されるべきものである。

この仕事に限らず、日本における人文・社会系の研究業績は、あるいはその評判は、半ば鎖国状態ともいえるべき日本国内では名(虚名であろうか?)が高くとも、世界的評価に乏しく、ないしは実際にいい仕事であっても世界の学界にとって正当に appreciate されることが少ないものが多いのではなからうか(那珂通世の元朝秘史の研究がその好例であるが、appreciate されない原因の一端は彼が欧米の学界における研究発表のルールに従わなかった点にある)。それに反して理工系の学問は、全く世界の学界の中の一員として活躍している。この点について人文・社会系の研究者たちは domestic な勢望に満足することなく、強く自省する必要があるのではないか。

(3) ユネスコの『世界史』については、通読してないので比較をしなかった。